D&G 研究会　2006/03/18, 04/13, 04/27　担当：大久保歩
ミシェル・フーコー、『知の考古学』（中村雄二郎訳、河出書房新社、2006 年（新装新版）。）
Michel Foucault, *L'archéologie du savoir*, Paris, Gallimard, 1969.
訳は適宜変更を加えてある。［　］は発表者による補足を示す。

第 4 章　考古学的記述　203-296 頁　pp.175-255

1. 考古学と諸観念の歴史［思想史］　205-213 頁 pp.177-183

・いまや歩みを逆転し、適用の可能な領域へと進む。
・「考古学」＝ひとつの装置、機械。
・この機械が作動するかどうか、何を作りだしうるのか、確かめなければならない。この「考古学」は何を提供してくれるのか？

・ひとつの疑念：私［フーコー］は、「諸観念の歴史＝思想史［以降、「思想史」とだけ記す］」の空間のうちにいたのではないか？
→考古学的分析が「思想史」の記述とどの点で異なるか示す必要性。

・思想史の二つの役割：

1. 側面と余白の歴史を語る。人々のあいだに匿名のまま伝わる、表象の働きに向かう歴史。浮遊する言語の、かたちなき作品の、結び付けられない主題の、歴史。知ではなく臆見 opinion の、真理ではなく誤りの、思考の形式ではなく心性の諸類型の分析。
2. 現存する諸学問 discipline を横切り、それらを扱い、それらを再解釈する。したがって、周縁の領域を構成するよりはむしろ、ひとつの分析の様式 style、ひとつのパースペクティブを構成する。
   →・歴史的な領野（科学、文学、哲学）における発生と解体を記述する。
   　・ある領域から他の領域への交換や媒介の働きすべてを記述する。

→・思想史の大きな主題：発生、連続性、全体化。→歴史分析の伝統的な形式に結びつく。
←→考古学的記述：思想史の放棄、思想史の諸要請、諸手法の拒絶であり、人間が言ったことについての全く別の歴史。

・考古学的分析と思想史のあいだの主要な四つの差異：
1. 新しさの指定 assignation　2. 矛盾の分析　3. 比較記述　4. 変形 transformation の見定め
・考古学のいくつかの原理：

1. 言説の中に隠れてたりあらわれたりする、思考や表象、イメージ、主題、執念などを明確化しようとするのではなく、言説そのものを、規則に従う実践である限りのこの言説を、明確化しようとする。「記録 document」としてや他のものの記号としてではなく、その固有のボリュームにおいて、モニュメント monument として、言説を扱う。

2. 諸言説の連続性や発生、解体を発見しようとするのではなく、言説をその特殊性において定義しようとする。「臆断の学 doxologie」ではなく、言説の様態の差異的 différentiel 分析。
3. 作品という至高の形象に向けて整序されるのではなく、個々の作品を横断し、しばしばそれらに命令しそれらを支配する、言説的実践の諸類型と諸規則を定義する。
4. 言説を発する瞬間に人間が考え、望み、目指し、試され、欲望されたものを再構成しようとするのではなく、書き直しであり、外在性の形式の中での、すでに書かれたことの規則的な変形である。起源の秘密への回帰ではなく、言説－対象 objet の体系的記述である。

2. オリジナルなもの l'original と規則的なもの　214-226 頁　pp.184-194

・思想史：言説の領野を二つの価値を持った一つの領域として扱う（古い・新しい、新奇な・繰り返された、伝統的な・オリジナルな）。
→・定式化 formulation の二つのカテゴリー：

1. 価値があり、相対的に数が少なく、初めて出現し、類似の先行者を持たず、他のもののモデルとして役立ち、創造と呼ばれるに値するもの。発明、変化、変貌。→思考の出来事の継起。真理や形式の発生。
2. 月並みで、平凡な、大量の、すでに言われたことから、しばしば文字通り反復することによって、派生したもの。惰性、重力、過去の緩慢な集積、言われたことの無限の沈殿。→結果の絶え間ない広がり。

・思想史：この二つの審級のあいだにつねにさまざまな関係を規定する（葛藤、抵抗、抑圧、隠蔽、忘却　／　発見の反響、伝播の速度と広がり　／　すでに構造化された領野への新しいものの統合）が、古いものと新しいものの二極的分析は維持される。
→・オリジナル性の記述：非常に難しい、二つの方法論的問題を立てる。

1. 先行 précession [1]：すべての言説を測り、反復されたものからオリジナルなものを区別する、絶対的尺度の役割を果たしえない。先行の見定めは、それだけでは言説的順序を規定するには不十分であり、分析される言説、選択されるレベル、確立された階層に従属する。
2. 類似［ressemblance　日本語訳では「相似」］：いかなる意味、いかなる基準において、「これはすでに言われたことだ」といいうるのか？　二つの言表が全く同じであることは、それらを完全に同一視することを許容しない。こうした類比は、それが見いだされる言説領野の効果である。

→・オリジナル性への問いが意味を持つのは、非常に厳密に定義された諸セリーの中、限界と領域が確立された集合の中、十分に等質的な言説領野を区切る線の間、でしかない。しかし、すでに言われたことの莫大な集積の中に類似のテキストを探すことは、幼稚な歴史家の慰みごとである。

・考古学的記述：言表の規則性を確立しようとだけ試みる。

[1]原書 186 頁 9 行目の procession（日本語訳 216 頁 10 行目において「行列」と訳されている）を、précession の誤植と見なす。

・規則性：どのような言語運用であれ、その存在を保証し規定する言表機能の行使される諸条件の集合。出現の実際の領野を特定する。それは、逸脱した言表（異常な、予言的な、遅れたなど）を特徴付けるような不規則性と対立するわけではない。むしろ、他の諸言表を特徴付ける、他の規則性と対立する。
→言表的観点からは、ひとつの発見は、それを反復するテクストに劣らず、規則的である。規則性は、突飛な編制に劣らず、月並みさの中でも働き、有効で活動的である。
→・言表的規則性の分析のいくつもの方向：

1. 言表的等質性：言表的規則性の等質な諸領野をもち得るが、これらは互いに異なる。言語学的類比 analogie（翻訳可能性）と論理的同一性（同値）と言表的等質性を区別しなければならない。
   →言表的等質性（と異質性）は、言語学的連続（と変化）や論理的同一性（と差異）と交錯する。
2. 言表的規則性内部のヒエラルキー：すべての言表は何らかの規則性の領域に属するが、規則の一般性の度合いは異なる。
   →・言表的派生の木：底辺に、最も広大な広がりの中で編制の諸規則を実現する諸言表があり、頂点といくつかの分岐のあとには、同じ規則性ではあるが、その広がりの中でより細かく分節化され、より詳しく画定され局地化された諸言表がある。
   →・言表的派生の木：公理からの演繹でも、ひとつの一般的観念やひとつの哲学的核心からの発芽でも、ある発見からの心理学的発生でもない。考古学的秩序は体系性のそれでも年代的継起のそれでもない。その秩序は自律性を持ち、それら相互に関係と依存がある。

→・言説的編制の分析：包括的 totalitaire 時期設定の企てではない。言表的等質性はそれ固有の時間的切断を有し、言語のうちに見出されるほかのいかなる同一性や差異ももたらさない。それは、配置、ヒエラルキーを確立しており、一度に包括的に与えられる、一塊で無定形の共時態を排除する。

3. さまざまな矛盾　227-237 頁　pp.195-204

・思想史：分析する言説に首尾一貫性 cohérence があると信じる。
→言説を組織し、隠れた統一性 unité を回復させる、凝集 cohésion の原理を発見しなければならない。
→・首尾一貫性という法：発見的規則、手続き上の義務、探究の道徳的拘束（矛盾をむやみに増大させないこと、ささいな差異にこだわらないこと等々）であると同時に、探究の結果。

・首尾一貫性を発見する、さまざまな手段：
1. 命題の真理やその関係の分析→論理的無矛盾の領野。体系性。
2. 類比や象徴の糸を辿る→イメージ的・情動的 affective・欲望的主題系 thématique。可塑的連続性

・さまざまなレベルにおける首尾一貫性：

1. 語る主体において意識的であった表象のレベル。顕在的。
2. 作者を拘束する構造のレベル。非顕在的。
3. 個人のレベル（伝記、環境など）。

→・首尾一貫性の役割：直接目に見える矛盾が、表面のきらめき以外の何ものでもなく、唯一の焦点にこの散らばった輝きの戯れを還元しなければならないということを示す。矛盾は、自らを隠す、あるいは隠された、統一性の幻影である。

・根本的な矛盾：こうした［首尾一貫性を求める探究の］作業の果てに現れる。あらゆる小さな矛盾を説明し、それらに堅い基礎 fondement を与える、組織原理。秘密の基礎づけの fondatrice 法。
→言説の存在の法則そのものを構成する。そこから発して、言説はあらわれる。→言説の歴史性の原理。

→・思想史における、矛盾の二つのレベル：

1. 見かけ［apparence　仮象］のレベル：言説の深い統一性のうちに解消される。言説は、その偶然的な現前やあまりに可視的な身体 corps を取り去るべき、理念的形象となる。
2. 基礎のレベル：言説そのものを生じさせる。言説は、矛盾が取りうる、経験的な形象となり、人はその見かけの凝集を破壊し、矛盾をその闖入とその暴力において再び捉えなければならない。

→・言説：ひとつの矛盾から別の矛盾へ至る道。言説を分析することとは矛盾を消し去り、再び出現させるさせること。

・考古学的分析にとっての矛盾：見かけでも原理でもなく、それ自体として記述すべき対象。

・例：リンネの生物不変説的 fixist 原理と、ビュフォン、ディドロ、ボルドゥ、メイエなどの「進化論的」主張
→・考古学的分析：両者が、種と類の記述において共通の場をもっていたことを示す（対象としての、器官の可視的な構造。対象を画定する二つの仕方。一方における類縁性のグループと、他方における規則正しい表という、格子。）。
→対象領域・画定・格子からふたつのテーゼの間の矛盾を派生させることにより、矛盾が占める場を定義し、二者択一の分岐点を露にし、二つの言説が並置される分岐と場を位置付ける。隔たりの尺度と形態を規定すること。不和 dissension の空間を定義すること。

→・考古学：言説のあらゆるレベルにおいて行使される、一般的機能として、矛盾を扱うことをやめ、矛盾のさまざまな類型 type・さまざまなレベル・さまざまな機能を分析する。

・類型：

1. 派生的矛盾：言表の体制にはなんら影響を与えず、命題と主張の唯一の平面の上に位置付

けられる。同じ言説編制 formation、同じ点、言表機能の行使の同じ条件。分析の到達点としての限界 terminus ad quam。

2. 外的［extrinsèque　非本質的］矛盾：異なる言説編制間の対立。分析の出発点としての限界 terminus a quo。
3. 内的［intrinsèque　本質的］矛盾：言説編制それ自体の中で展開される。編制のシステムのひとつの点において生まれ、下位システムを生じさせる。言表の形成の仕方の違い。考古学的分析に適合。

・レベル（内的矛盾に関して）：

1. 対象の不適合 inadéquation
2. 言表様態 modalié の分岐
3. 概念の両立不可能性
4. 理論的選択の排除

・機能（言説的実践における）：

1. 言表領野の加算的発展：新たな対象、新たな言表様態、新たな概念、適用の変更。言説の実定性のシステムの変更をともなわない。
2. 言説領野の再組織化：言表のあるグループを別のグループへ翻訳することやより一般的な空間へ統合することに関する問いを立てる。別の構造をもった対象、別の適用領野、別の類型の言表行為。編制の諸規則は変更されない。
3. 批判的：言説的実践の存在と「受容可能性」を危険にさらす。言説的実践の現実での不可能性の点とその歴史的逆行の点を規定する。

→・言説編制：多様な不和の空間。さまざまな対立の集合。
→・考古学的分析：矛盾の優位を取り除き、規定された言説的実践において、対立が構成される点を見定め、対立のとる形態、それら相互の関係、それが支配する領域を規定する。多数の凹凸の中に言説を維持する。ロゴスの無差異の領域 element の中で、一様に失われ再発見され、解決されつねに再生する、矛盾の主題を除去する。

4. 比較に基づく事実　238-250 頁　pp.205-215

・考古学的分析：言説的編制を個別化し、記述する。
→それらを比較し、同時性において互いに対立させ、同じ暦を持たないものから区別し、非言説的実践と関連づけなければならない。

1. ・比較はつねに限られ、区域的 régional である。考古学は、一般的な形式を明らかにしようとするのではなく、特異な布置 configuration を描こうとする。
   例　古典主義時代における、一般文法、富の分析、博物誌
   →・間言説的 interdiscursive 布置：諸言説的編制のよく規定されたひとつの集合であり、諸編制のあいだにいくつかの記述可能な関係がある。また、この間言説的集合は言説のほか

の類型と関係を持つ。
←→・反論 1：「なぜ宇宙論、生理学、聖書解釈について語らないのか？　それらは『言葉と物』の分析を無効にしないだろうか？」
→・フーコーの答え：確かにそのとおり。私の分析は限界づけられている。わたしは特定の布置をを規定しようとした。
・反論 2　「なぜあなたは一般文法を、同時代の人がしていたように、聖書批判や修辞学、美術理論とつき合せなかったのか？　あなたが記述したことにどのような特権があるのか？」
→・フーコーの答え：特権はまったくない。それは記述可能な集合のひとつに過ぎない。新たな間実定性が描きうる。
→考古学が目指すもの：ひとつの科学やひとつの合理性、ひとつの心性、ひとつの文化ではなく、さまざまな間実定性の絡み合いである。比較分析は、統一する行為ではなく、多様化する行為である。

2. ・考古学が解放しようとするもの：編制の規則のレベルに現われる、類比と差異の働き。
→五つの課題：
(a) 考古学的同形 isomorphisme：全く異なる言説的要素が類比の規則を通してどのように形成されるか示すこと。
(b) 考古学的モデル：言説のさまざまな類型の中で、こうした規則がどの程度、同じやり方で適用されるのか否か、同じ順序で連結されるのか否か、同じモデルにしたがって配置されるのか否か、示すこと。
(c) 考古学的同位体 isotopie：完全に異なる諸概念が、実定性のシステムの分岐においてどのようにひとつの類比の場所を占めるか、示すこと。
(d) 考古学的ずれ：ひとつの同じ観念が、考古学的に区別される二つの要素をどのように覆うことができるのか、示すこと。
(e) 考古学的相関関係：ある実定性から別の実定性へと、従属や補完の諸関係がどのように確立されるのか、示すこと。
→影響や交換、情報伝達、コミュニケーションなどの確定に支えを求めるのではなく、それらから後退し、分析の攻撃レベルをずらし、それらを可能にしているものを明るみに出すこと、すなわち、交換の働きにとって、歴史的可能性の条件であった、ベクトルと差異的受容性（浸透性・非浸透性）の領野を描き出すことが問題である。間実定性の布置とは、言説のコミュニケーションの法則である。

3. 言説的編制と非言説的領域（制度、政治的出来事、経済的実践・過程）とのあいだの関係。
・例　18 世紀終わりの臨床医学の創設と、同時代の政治的出来事、経済的現象、制度的変化との関係。
→・象徴的分析：互いに反映し、象徴しあう、同時的な二つの表現を見る（有機的一体性の観念と、封建体制下の経済的一体性など）。
・因果関係的分析：政治的変化や経済的過程が、どの程度科学者の意識を規定したか、探究する。

・考古学：政治的実践が、どのようにそしていかなる資格で、言説の出現、挿入、作動の条件の一部となるか、示そうとする。さまざまなレベルで（医学的対象、医者に与えられる地位、医学的言説に与えられた機能）。実践としての医学的言説。

→言説の考古学的記述：一般史の次元の中で展開される。

5. 変化と変形　251-269 頁　pp.216-231

・変化についての考古学的記述：歴史を凝固させるためにのみ扱っているように見える。

1. 言説的編制を記述することで、そこに現われている時間的系列 série を無視し、一様に、同じ仕方で、時間のすべての点に当てはまる、一般的規則を探究する。
2. 年代に助けを求めるが、それはただ、実定性の限界に、ピン留めの二つの点を固定するためのように思われる。すなわち、その実定性が生まれる瞬間と、消え去る瞬間である。

→実定性の共時性と、交替の瞬間性とともに、時間は逃げさり、歴史的記述の可能性は消え去る。
←→物事はもっと近くで見てみるべきである。

A

・言説編制の外見上の共時性：時間的継起の—定式化のカレンダー—の宙吊り。
→言説的編制の時間性を特徴づけてその時間性を諸々の系に分節化する、諸関係を出現させる。

1. 出来事のクラッチ合わせ embrayage
   ・考古学：言表の集合の編制の規則を定義することによって、出来事の継起が、どのようにして言説の対象となるのか、明らかにする。
   →言説の浸透性の度合いと形式を分析し、その分節の原理を一連の出来事の連鎖に与え、出来事が言表に転写される操作子を定義する。
2. 派生の時間的ベクトル
   ・編制の規則：同じ一般性を持たない。ある規則は、より特殊で、他から派生する。こうした従属は、ヒエラルキーだけでなく、時間的ベクトルをも含む。
   →必然的に継起的な諸関係とそうではない他の諸関係との交錯。

・考古学が宙吊りにするもの：継起が絶対であるというテーゼ。言説の中には唯一の形式や継起の唯一のレベルしか存在しないというテーゼ。
→考古学は、こうしたテーゼの代わりに、言説の中で重ね合わされる継起のさまざまな形態や、このようにして特定化された継起が分節化される仕方を分析する。
→・解放されるべき、二つのモデル：1. 話し言葉 parole の線的モデル。　2. 意識の流れのモデル。
←→・言説：連鎖と継起についてそれ固有の形式をもつ実践。

B

・考古学：切断、実定性の全く新しい形態、突然の再配分について語る。差異を増幅させ、コミュニケーションのさまざまな線を入り組ませ、さまざまな移行をいっそう困難にする。
・考古学のパラドックス：差異を増やすことにあるのではなく、それを還元することを拒絶することにある。考古学の企てとは、差異を克服することではなく、それを分析し、それがどこに存するのかを言い、それを差異化する différencier ことにある。
→・差異化の方法：

1. ありうる出来事の複数の平面を区別すること：
   1. 特異な出現における、言表それ自身の平面。　2. 対象、言表行為の類型、概念、選択的戦術などの出現する平面。　3. すでに実現している諸規則から新たな編制の規則が派生する平面。　4. ある言説編制から別のそれへ交替が起こる平面。
   ・こうした出来事：非常に稀で、考古学にとって最も重要。考古学だけがこれを出現させることができる。
2. 変形の分析：こうした出来事を分析するために、こうした変更が何から成っているのか、定義すること。変化（すべての出来事の一般的な入れ物であると同時に、出来事の継起の抽象的原理）への無差異の参照ではない。
   →・いくつのかの変形の類型：
   1. ある編制のシステムのさまざまの要素に関して。　2. ある編制のシステムに特徴的な諸関係に関して。　3. 編制の諸規則間の関係に関して。　4. さまざまな実定性のあいだの関係に関して。
3. 連続性、回帰、反復：ある言説的編制が別のそれへ置き換わるということは、諸関係の一般的な変形が生み出されたということであり、それは必ずしもすべての要素（対象、言表行為、概念、理論的選択）を変質させるわけではない。
   ←・編制の規則：対象・言表行為・概念などの規定ではなく、こうした多様性と分散の原理である。こうした要素の一つが同一でありつづけ、しかも分散のさまざまなシステムに属し互いに区別される編制の規則に属することはありうる。
   →・考古学：連続体を第一の究極的な所与と捉えず、反対に、同一のもの、反復されたもの、中断されないものを切断に劣らず問題であると考える。
4. 実定性の出現と消失、交代の働き：等質な過程ではない。切断は、つねに規定された諸実定性のあいだにあって、いくつかの異なる変形によって特定化された、非連続性である。

6. 科学と知　270-296 頁　pp.232-255

・問い：これまでの分析において、なぜ「文学的」、「哲学的」、「政治的」テキストを体系的に無視してきたのか？　科学の秩序に限っても、なぜ数学、物理学、化学の前を黙って通り過ぎたのか？　一言で言えば、科学の分析に対する考古学の関係は、どのようなものか？

a）実定性、学問 discipline、科学

・第一の問い：考古学は、つねに準科学的なものにとどまるものに好都合な分析ではないか？

もし、「学問 discipline」＝科学的なモデルにその組織を借り、首尾一貫性と証明可能性を目指し、科学として受け入れられ、制度化され、伝播され、ときには授業がされる、言表の集合、とするならば、考古学は、実際には科学ではない、学問を記述しているといえないだろうか？
→・答え：否。考古学は諸学問を記述しない。確立された学問と言説的編制との間に一対一関係はうち立てられえない。←諸学問は、実定性の記述のきっかけになりえるとしても、それは実定性の限界を記述しない。

例
・19 世紀初めにおける精神医学的学問の出現
←この言説的実践のために言表の編制を特性づけるひとつの集合（入院、監禁、社会的排除の条件と手続き、法解釈の諸規則、産業労働とブルジョワ道徳の規範）が可能にした。
←→この言説的編制は、この学問の境界を大きくはみ出し（法律のテクスト、文学的表現、政治レベルでの決定、日常的な話）、それを四方から取り囲む。
・精神医学の確立以前の、17・18 世紀：学問は不在でも、言説的実践は活動していた。→記述することが完全に可能な、ひとつの言説的編制とひとつの実定性が存在し、これにはいかなる学問も対応しない。

・［第二の］問い：言説的編制・実定性とは、未来の科学の下書き、科学の過去への遡及的投影ではないか？
→・答え：否（例：博物誌における、生命に関する統一的な科学の排除。一般文法における、聖書注解や言語哲学の放置）。

・［第三の問い］：実定性が存在するところに、科学は存在しえないと、実定性はつねに科学を排除すると、言うべきか？
→・［答え］：［否］（例：臨床医学は確かに科学ではないが、生理学・化学・微生物学などの諸科学の間に明確な諸関係を確立するなどのように、科学を排除しない）。

→実定性と科学のあいだの関係はどのようになっているのか？

b）知

・実定性を分析すること：ひとつの言説的実践がどのような諸規則にしたがって、対象のグループ、言表行為の集合、概念の働き、理論的選択の系列を編制するのか、示すこと。
→・こうした諸要素：科学を構成するのではない。首尾一貫した（あるいはしていない）諸命題が打ち立てられ、多かれ少なかれ正確な記述が展開され、検証が行われ、理論が繰り広げられる、出発点。結果として場合によってはひとつの科学的言説が構成される。
→・科学：生きられたはずのもの、あるいは生きられるべきもの（科学に固有の、理念性の志向が基礎づけられるために）に関係づけられるのではなく、言われたはずのもの、あるいは言われるべきものに関係づけられる。

・この諸要素（対象、言表行為の主体、概念、戦術）の集合：知と呼ばれる。科学に独立して知は存在するが、規定された言説的実践なしには知は存在しない。

→・考古学：意識–認識–科学の軸を経巡るのではなく、言説的実践–知–科学の軸を経巡る。

・科学の領域 domaine と考古学の領土［territoire 版図］：
1. 科学性の領域：構築 construction 法則 lois にしたがう、諸命題が属する。
2. 考古学的領土：科学的テクストと同様に、「文学的」あるいは「哲学的」テクストも横断することができる。

・科学：言説的編制の諸要素の中に、そして知の土台の上に、出現する。
→・二つの系列の問題：1. 考古学的領土の中で、科学性の区域 région の位置と役割はどのようなものか？　2. 与えられた言説的編制の中で、科学性の区域の出現は、どのような順序とどのような仮定に従って、成し遂げられるのか？
→今ここで答えることのできないような問題であるが、重要なのは、どのような方向でそれらを分析できるか、示すことである。

c）知とイデオロギー

・科学：知の領野 champ の中に位置付けられ、そこでひとつの役割を演ずる。その役割は、さまざまな言説的編制にしたがって変わり、その変異と共に修正される。
→考古学的分析：実定的に、ひとつの科学が知の要素の中にどのように書き込まれ、そこでどのように機能するのか、示す。

・この働き［jeu 戯れ？］の空間：イデオロギーと科学の関係が確立され、特定される。
・科学的言説へのイデオロギーの影響や科学のイデオロギー的機能：使用のレベルでも意識のレベルでもなく、科学が知の上で切り出される場で、分節化される。
→・科学に対して立てられるイデオロギーの問い：言説的実践としての科学の存在と他の実践の中におけるその機能の問いである（例：資本主義社会における経済学の働き）。

→いくつかの命題：

1. イデオロギーは科学性を排除しない。臨床医学や経済学の言説ほど、イデオロギーに場を空けてやった言説はない。
2. 矛盾や空隙、理論的欠陥は、確かに、ひとつの科学のイデオロギー的機能を知らせる。しかし、この機能の分析は、実定性のレベルや、編制の諸法則と科学性の諸構造との間の関係のレベルにおいて、行われなければならない。
3. 誤りを修正し、その形式化を強化することによって、ひとつの言説は、その分イデオロギーとの関係を弱めたりはしない。

4. ひとつの科学のイデオロギー的機能を攻撃し、それを明るみに出し修正することは、それを言説的編制として問い直すことである。

d）さまざまな閾とその年代学 chronologie

・ひとつの言説的編制に関する、さまざまな出現：

1. 実定性の閾：ひとつの言説的実践が個体化され、自律性を得る瞬間、したがって言表の唯一の同じ編制システムが実行される瞬間、あるいは、このシステムが変形する瞬間。
2. 認識論化épistémologisation の閾：ある言説的編制の働きの中で、言表のある集合が切り抜かれ、それが検証と首尾一貫性の規範を強調し、知に関して主要な機能を行使するとき。
3. 科学性の閾：認識論的形象がいくつかの形式的基準に従い、その言表が、命題のいくつかの構築法則にも対応するとき。
4. 形式化の閾：科学的言説が、みずからにとって必要な諸公理、みずからの用いる諸要素、みずからにとって合法的な命題構造、みずからの受け入れる変形を規定できるとき、したがって、科学的言説がみずからの構成する形式的組織édifice を展開できるとき。

・こうしたさまざまな閾の時間の中への配分（継起、ずれ、同時）＝年代学：規則的でもなければ等質的でもない。
→・独自の singulier 順序＝秩序 ordre：それぞれの言説的編制の特徴のひとつ（さまざまな例。284-285 頁、pp.284-285）。

←→・科学のうちに、さまざまなレベル、閾、切断をもつ言説的実践を認めない場合：いまだ科学でないものと決定的に科学的であるものとの間の分割しか記述しえない。すべては、つねに反復すべき、基礎づけの単調な行為に還元される。

・数学：実定性・認識論化・科学性・形式化の閾を一度に越えた、唯一の言説的実践。
→歴史性の原理として、超–歴史的 méta-historique モデルとして、見なされてきた。→歴史性の諸々の独自の形態すべてを等質化し、さまざまな閾すべてを唯一の切断に還元する危険。

e）科学の歴史のさまざまな類型

・多様な閾：歴史分析のさまざまな形態を可能にする。

1. 回帰的分析：形式化のレベルで、すでに構成された科学の内部で、行われる。数学史において、過去のことは、より抽象的でより強力な理論によって、あるいはより高いレベルから、特殊例として、素朴なモデルとして、部分的で一般化が不十分な素描として、明らかにされる（例：ギリシャの取り尽くし法と積分）。
2. 科学の認識論的歴史：科学性の閾に位置づけられ、さまざまな認識論的形象から出発して乗り越えられ、その閾が乗り越えられた仕方が問われる。すでに構成された科学を規範とする（真理と誤謬、合理的なものと非合理的なもの、障害と多産性 fécondité、純粋さと不

純さ、科学的なものと非科学的なもの)。

3. 考古学的歴史：認識論化の閾を攻撃点とする。露わにされるのは、知を生み出し、この知が科学の地位と役割を担うかぎりにおける、言説的実践である。問題となるのは、認識論的な構造を考慮せずに言説的編制を記述することではなく、ひとつの科学の設立が、そしてときにはその形式化までの移行が、言説的編制の中に、またその実定性の修正の中に、どのようにみずからの可能性と影響を見出したか、示すことである。

→・エピステーメーépistémè：ある与えられた時代において、認識論的諸形象や科学を生み出し、ときに形式化されたシステムを生み出す、さまざまな言説的実践を統一する諸関係の総体 ensemble（閾の間の移行が行われる様態 mode、閾の配分、側面的関係)。
→・エピステーメーのいくつかの本質的な特徴：

1. 汲みつくしえない領野を開き、決して閉じられない。諸関係の無際限な indéfini 領野。
2. 不動の形象ではなく、切れ目やずれ、一致の、無際限に可動的な集合。
3. ある与えられた時代において言説に課せられる、制限と限界の働きを把握することを可能にする。しかしこれら制限と限界は否定的なものではない。
4. 一つの科学が存在する権利を明らかにするのではなく、それが存在するという事実を明らかにする。この事実を、超越論的主体のうちで事実と権利を基礎づける起源の贈与の審級に関係づけるのではなく、歴史的実践の過程に関係づける。

ｆ）他の考古学

・宙吊りにされた問い：認識論的形象や科学の方向において知の規則性を分析しようとはしない、考古学的分析は考えられるのだろうか？　考古学は、科学の歴史を問うあるひとつの仕方でなければならないのか？
→異なる方向へと発展させられた考古学：

1. セクシュアリティー sexualité：言説的実践としての分析。セクシュアリティーの禁止、排除、限界、価値付け、自由、侵犯、そしてセクシュアリティーの現われ（言語的あるいは非言語的）が、規定された言説的実践とどのように結びついているのか示す。「話し方」としてのセクシュアリティー。エピステーメーではなく、倫理éthique。
2. 絵画：ある時代において、空間、距離、深さ、色、光、比率 proportion、量感、輪郭が、言説的実践の内で、名指され、言表され、概念化されているかどうか探究する。技術や効果の中にかたちをとった、言説的実践としての絵画。絵画は、純粋なヴィジョン（あとで空間の物質性のうちに書き込まれなければならないような）ではなく、裸の挙作 geste（あとからの解釈によってそこから声なき、無限に空虚な意味作用 signification が解放されるような）でもなく、知の実定性によって全面的に貫かれている。
3. 政治的知：ある社会やあるグループ、ある階級の政治的な振舞いが、記述可能な規定された言説的実践によって貫かれているかどうか見る。政治的知は、実践の新たな理論化の次元に属するのでも、理論の適用でもなく、はじめからさまざまな実践の領野の中に書き込まれている。

→・先ほどの問い：考古学は科学しか取り扱わないのか？　考古学は科学的言説のひとつの分析に過ぎないのか？
→・答え：二つとも否。
←・考古学が記述しようとするもの：特定の構造のうちにある科学ではなく、知の領域。考古学は科学とは異なる方向で知に問いかけ、科学とは異なる関係の網の目の中でそれを記述することができる。
・エピステーメーへの方向：［フーコーによって］これまで探索された唯一の方向。
←われわれの文化を特徴付けている勾配によって、言説的編制は絶えず認識論化されている。
→好ましい préférentiel 攻撃点ではあっても、考古学にとって義務づけられた領域ではない。